

# Photo Space

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 荻ノビル 5.6F

03-3359-7611 (Tel.) 03-3355-1462 (Fax)

<http://www.genken.ac>

[jimukyoku@genken.ac](mailto:jimukyoku@genken.ac)

責任編集 金瀬 胖

Summer 2023.6.23 NO.14 2022 年度ゼミ・修了展総括・2023 年度第 5 0 期開講記念号

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。



西船橋 2021 年 1 月 金瀬 胖

contents

## 再び写真へ

コロナが歴史的な出来事として語られるようになるには、まだ少し時間がかかりそうです。この時期に撮った写真をプリントして見ているのですが、これだと言い切るのには難しい、時間が止ったよう景色です。そして身体や気分はまだコロナのカスミのなかにあります。

カスミを取り払えば、地球の全滅の兆候のような気候変動や災害、ジェノサイドの政治。それは近代的な戦争—政治の循環ではなくて、他者絶滅と独裁だけを目的とする政治、つまり政治の死滅とも言うべき日々があります。あまり大きなことなので、個人の思考の範囲を超えてしまっている、なので思考停止と無力感が広がっている。自分もそうなっていないか、と自問を重ねる。コロナ後遺症のせいもあるのでしょうかとにかくスカッとしないう、起動が鈍い、言葉は上滑りしてしまう。それで現研、視点をはじめとする写真を見ると、懸命な努力があることが分かります。やはり、再び写真へ、です。

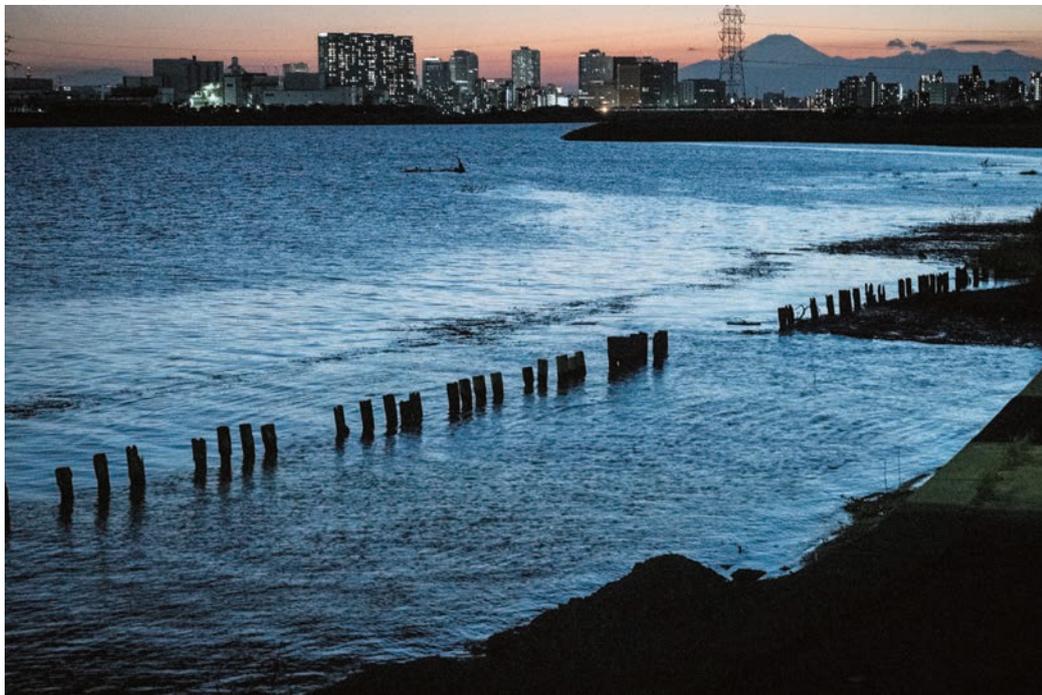
思考停止、感覚の弛緩を取り払うには私の場合、写真のほかには読書と音楽。最近聴いたのはギドン・クレームルのバツハ「Partita Nr.2 Ciacconne」(Lockenhaus, September 2001)。彼はヴァイオリンの世界の名手どころでなく、それ以上の何者かです。言いようがないけれど、心臓と背骨を貫くような極限の音を響かせ、弛んだ神経を張り直します。で、すこし元気になってこの文を書いています。

上の写真は「コロナ期」の西船橋駅付近。

教務主任・金瀬 胖

- 1: 金瀬 胖
- 2-3: 平山 謙 (写真集)
- 4: OE Taisuke (MFW)
- 5: 江田 悟志 (MFW)
- 6: 栗原 恭子 (総合科)
- 7: 青柳 和男 (土曜ゼミ)
- 8: 名倉 忠義 (入江ゼミ)
- 9: 中西 勝彦 (入江ゼミ)
- 10: 伊藤 亨 (入江ゼミ)
- 11: とみた やすよ (日曜専科)
- 12: 小林 功 (尾辻ゼミ)
- 13: 尾辻 ゼミ
- 14: 大山 幸子 (写真集)
- 15: JPS ヤングアイ・会長賞
- 16: 新聞 陽子 (写真集)
- 17: 金瀬 胖 (写真集)
- 18: オンライン特別講座案内





著者 平山謙  
 発行日 2023/5/1  
 構成・監修 英伸三  
 発行所 東京印書館  
 定価 2,750円

## 平山謙写真集「羽田浦写真帳」

羽田浦は、羽田空港に隣接する多摩川河口地域の旧称で、東京湾を漁場とした漁業者や町工場働く人々が住む一帯である。平山謙さんは定年退職後、この羽田浦の河口風景と住民の日常を、2013年夏から2022年冬まで、10年かけて丹念に記録して本書を完成させた。羽田浦からそう遠くないところに住まいがあり、撮影にはいつも自転車で通ったという。

ページを開くと、春、薄紅色に染まった日の出の河口風景から始まり、運河沿いの桜、出漁する船、空港から飛び立つ大型旅客機、水辺を楽しむ人々の姿などが快適なテンポで展開し、夏まつり、商店街、水辺の野鳥の群れと続く。空港入口の海老取川の堤防を背にして縁台将棋を指す男性たちの向こうに見える弁天橋は、かつて60年安保および70年第一次、第二次羽田

闘争で学生デモ隊と機動隊が衝突した現場である。本書の特徴は、季節と時間帯で変化する空の色、例えば作者のいうブルーモーメントの河口の風景描写のすばらしさにある。茜色も美しく捉えられている。画面を大きく占めるブルーの川面と、茜色に染まった夕空のもと明かりを点し始めた川崎市街地と、富士山のシルエットの見開きの一枚などは、自然と都市が奏でる壮大なシンフォニーを聞くようである。また、このカットにも写っている松杭は、かつて砂利採取が盛んだった頃護岸用に設けられたもの、役目を終えた今も黒々とした姿で残り、河口の風物詩となっている。

写真一枚一枚に添えられた丁寧な解説文を読みながら、多くの方にゆっくり味わっていただきたい写真集です。 英伸三



**ENOSHIMA:Standing**

**0E Taisuke**

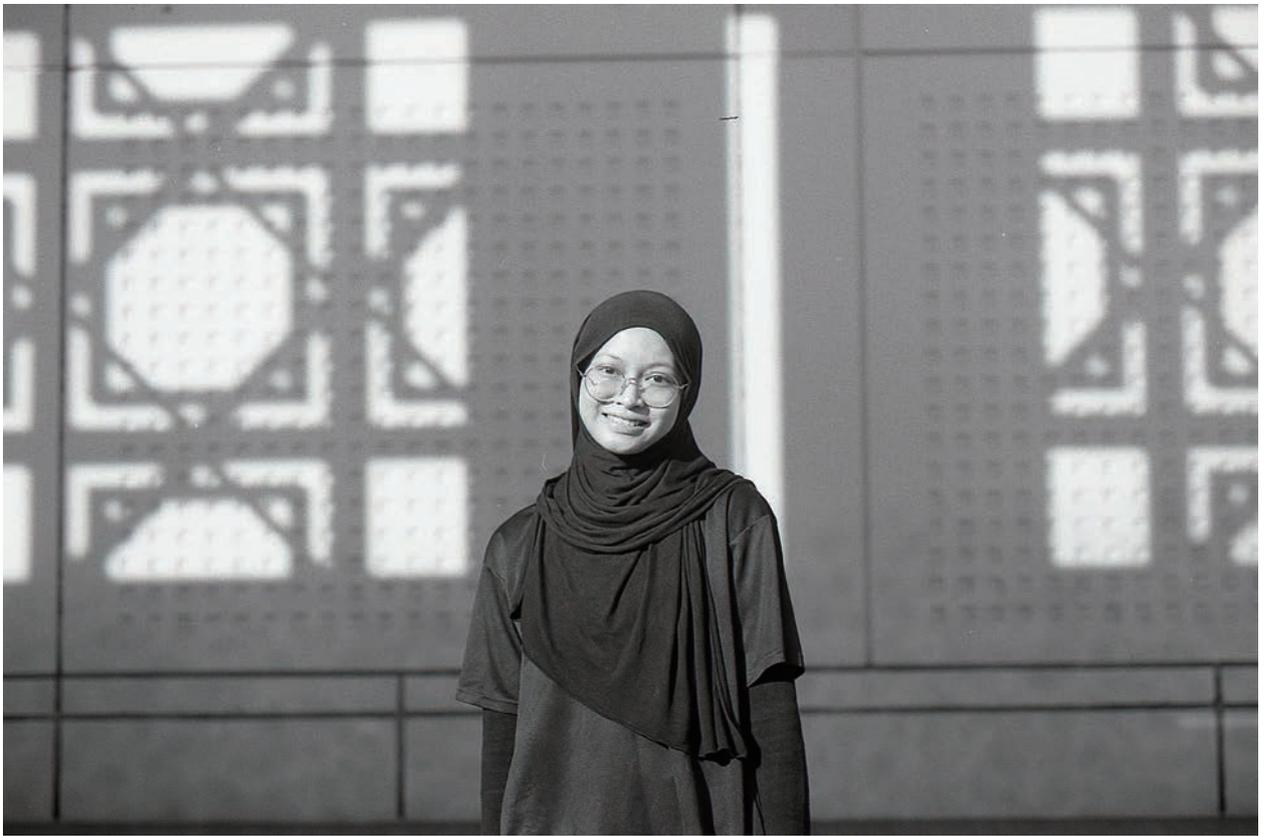
人里に近いながらも、進入を阻むような海食崖に囲まれた、江ノ島。

人々は畏れ敬う一方で、住み営めるよう手を加え、ついには観光地としてきました。

今の江ノ島の在り方には、祈りと侵食の歴史が幾重にも織りこまれています。

私の故郷にほど近い、そんな江ノ島からは、まるで人との折り合いをつけている様な、ある種の人間くささを感じるのです。

そんな今の江ノ島の在り方を、8x10の大判カメラを通して見つめています。



## One mile wonder 旧山手通りの日常 江田悟志

旧山手通りには3か国の大使館や教会、修道院があり「ヒルサイドテラス」には様々な人が集う。通勤で毎日通る為、違いの変化に敏感になり匂いを感じた時にスナップを撮っている。撮影したネガをプリントしてプレゼントする、そしてまた撮影させてもらう。「カメラが繋いでくれた縁」限りある枚数と偶然の出会いに喜びがある、写真をプレゼントするまでの期間も程よい時間。フィルムカメラで「街の一員」になれた。

モノクロフィルムワークショップ写真展より



## 「ウクライナってどこだろうね」 栗原恭子

私はロシアがウクライナを爆撃したというニュースを聞いてうくらいなっておどこにあるのかと思ってこの地球儀を手に入れました。平らな地図でみたものと違い北極に近くなるとずっとつぼまっていたなんて小さな国なんだろうという印象でした。私の家のぼちゃごちゃしたかたづかない机の上をみせてしまい恥ずかしいことこの上なしです。

(写真総合科修了展パンフレットより)

それぞれが「私はこんなことを表現したい」という気持ちが出ていて一人一人の個性を強く感じられ、作品制作において自分と向き合うことの大切さを感じる展示でした。同時に、展示をするという行為を楽しんでいることが伝わってきて、会場で見ている人が気持ちよくなるような空間に仕上がっていたと思います。

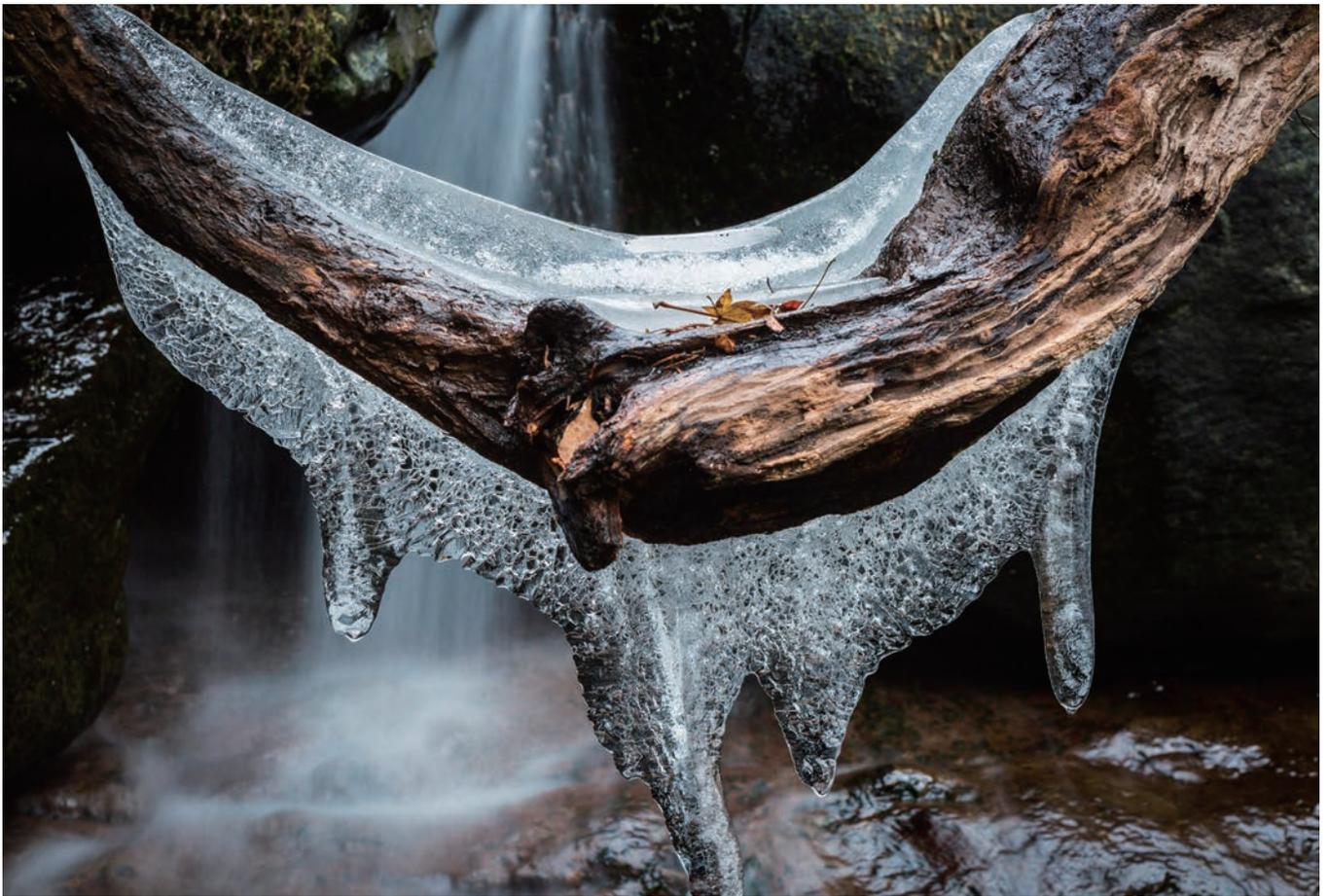
総合科担当講師 宮本遼

写真総合科修了展「サマリィ」より



## 「立春参り」 青柳和男

2月のはじめ、立春とはいえまだ肌寒い境内を散策していたら、風雨にさらされた木像の前に、春を誘うような花が飾られていた。二十四節気では「立春」は新しい1年が始まる日で、最も運気の強い時と云われ、この時期に神社仏閣にお参りすることを「立春参り」と云い幸運を願いに参拝に来る人がいる。正月の初詣とは異なり参拝客も少なく、静けさと寒さの中で正直な自分と向き合ってお参り出来るのかも知れない。



## 「伊豆の貌」名倉忠義

伊豆・天城山陵歩道は、自然との触れ合いを求めて高齢者から子供まで幅広い層のハイカーに親しまれている。雪と氷の季節でもあって私たちを拒むことは滅多にない。氷点下に冷やされた樹木に降り注ぐ雨が凍ったもので雨氷（うひょう）と呼ばれていることが最近になって解った。

入江進ゼミ写真展「共生」より



## 「惜しまれて閉店」 中西勝彦

2022年大晦日、地元で人気の鶏肉惣菜店「とりしょう」の店主は64年頑張ってきたが、高齢となり惜しまれつつ店を閉じた。親子孫3代のファンも多く、最後の味を求める行列は切れ間がなかった。店主は20数年にわたりネパールと交流を続け、学校建設の資金や奨学金の援助を行っていた。また子供食堂への支援もしてきた。撮影地 帰宅豊島商店街



入江ゼミ写真展「共生」は写真を通じて、戦争の記憶を受け継ぐ活動、寄稿変動に夜生物多様性の聞き、未来にわたってどんな人も共生できる社会と環境、民主主義の根幹とも言える表現の自由を・・・との思いを重ねてきました。今、私たちが取り組んできたテーマとは反対の事態が進行していることを、とても残念に思います。

新型コロナ禍で2年間ゼミ展を開催することができない事態もありました。撮影活動はこうした中でも、近隣の街・敏・家族また自然の中にあしを貼込、各自のテーマに沿って取り組んで、幸い去年は写真展の開催に至りました。今回も制約された中での撮影でしたが、発表する場が持てることになり、喜びを感じているところです。 実行委員長 伊藤亨



左記サイトにて出品作品を公開しています。<https://iriezemi.wixsite.com/iriezemi-2023zemiten>



「バス通り」とみたやすよ（日曜撮影専科）



「寄り道」とみたやすよ（日曜撮影専科）



## 「 コロナ禍の看護学生 」 小林 功

コロナの影響は看護学校の隅々にまで及んでいます。明日は厳しい医療現場で働く身であれば神経を使います。でも、オンライン授業が続く中でも、田植え、稲刈り、文化祭をやり、卒業式の合唱がNGなら手話やハンドベルでと機転を利かします。憲法・47年教育基本法を基礎に「学生が主人公」を貫く東葛看護専門学校です。



生田一美



今関禎矩



潮田展子



小林功



志摩悦子



新沢久美子



長谷川啓一



高橋美保



高松安子



長澤洋平



吉久保和子



本條武志

## 尾辻弥寿雄ゼミ写真展「視点自在」より

尾辻ゼミ 12 名は、グループ展や個展、写真集制作など個々の活動を主体とし成果を示してきました。このゼミ生活で初の一つ会場で現代社会を多様な視点で表現するグループ展を企画しました。個人の狭い範囲に終わりがちな写真展と異なりグループで発表するという取り組みは新しい緊張感を生み出しました。この経験生かし次の高みを目指し写真活動を続けていきます。

担当講師：尾辻弥寿雄



## 秋思とも遠まなざしの彼とみて

しうしともとほまなざしのかれとみて



著者 大山幸子

発行日 2023/6/1

発行所 東京印書館

構成・編集・ブックデザイン

滝川淳

定価 2,200円(税込)

## 口笛の追い越してゆく春の宵

くちぶえのおいこしてゆくはるのよい

### 「陶子の恋」大山幸子詩句篇

春の夢逢ひたき人へ逢いにゆく

「陶子の恋」大山幸子詩句篇が出版された。

表紙を開くと俳句＝ジャズが好きバーボンが好き生身魂＝葡萄棚の木漏れ日の写真が翹う様子を思わせる。どのページにも言葉の豊かさと響き、ドラマ性が我が身と重なり改めて又読み直す。日本語を見直す機会になるかもしれない。また、写真の使い方の自由さも参考になる。あえて写真集とせず本人のもつ俳

人としての力を重視し編集会議を繰り返し、以後デザイナーとのやり取りはすべてインターネットで行った。夏帽子（まえがき）では写真が取り持つ力を撮影実習で得た様子を記している。この本を作るために3年余の時間を要したがコロナ禍環境の中気力を維持し頑張れた。様々な恋を写真・俳句・詩・エッセイで綴った「陶子の恋」は言葉とのコラボ作品として自作品で一冊になっているのは日本初ではないだろうか。印刷発色も美しく手頃なサイズも魅力的に仕上がっている。 山本やす子



© 平川正枝

平川さん応募作品（上段）は2枚で一作品、背景はグレーにて山伏の写真と親和性を持たせた



© 高橋侑也

## 平川正枝さん、高橋侑也さん、JPS 展ヤングアイ・会長賞受賞

2023JPS 展のヤングアイ部門で、飯塚ゼミの平川正枝さんと高橋侑也さんの共同作品「聖（ひじり）」が、JPS 会長賞を受賞し高い評価をいただいた。

「ヤングアイ」は、全国の写真大学・専門学校などの写真教育機関で学ぶ人々の写真作品を対象にした賞である。「2名以上でユニットを組み、30秒のスライドショー形式で上映できる作品」というルールのもと、平川さんの「華神」と高橋さんの「山伏」の作品群より計13点を選び、応募した。

作品の制作・応募には、デザイナー富樫茂美さん（土曜ゼミ）、講師の宮本遼さん、現研事務局の山本知代子さんに協力して頂いた。ヤングアイ会長賞の受賞は、平川さん、高橋さんの写真の質の高さを示すと同時に、現研の写真教育のレベルの高さを証明するものと思う。

（講師：飯塚明夫）



神門前 2019.7.13

## 新聞陽子写真集 さくらの杜 ある戦後の光景・靖国

終戦記念日の8月15日、戦時中とみまごう光景の中には大人だけでなく子供がいた。桜の標本木があるこの神社は、春になると老若男女の区別なく多くの人々で賑わう。年間を通して訪れる人は様々だが、戦争を経験した人は、どんな思いを抱いてここを訪れるのだろうと考えた。戦争を知らない私は、平和が続くことを願い、この神社で目にした光景をカメラに収めた。

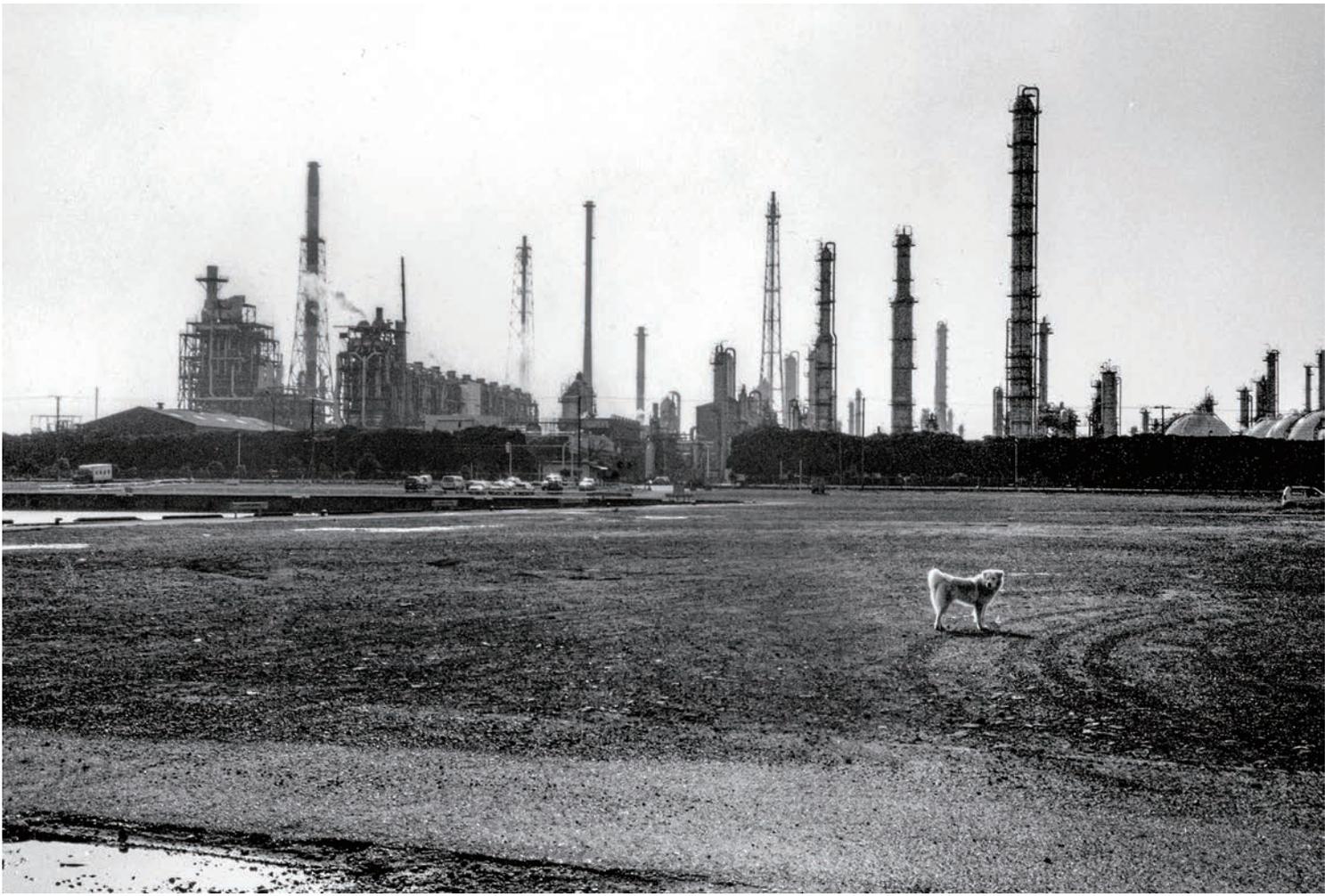
「新しい戦前」ということばが聞かれる今、続いてきた戦後をとぎれさせてはいけな  
い思いを新たにしている。

新聞陽子



境内 2020.3.29





市原市五井海岸 2010年



富津市佐貫 2007年

近日発行

金瀬胖 写真集

# Nostalgia 千葉 | 海街の記

1980年代から2023年、フィルムの時代からコロナ期まで、千葉の海、街を歩いた写真記録。

モノクロ・ダブルトーン、B5変形、ソフトカバー、154頁 東京印書館刊 7月10日発行 ¥3850(税込)

# 戦争イヤ

金井紀光  
清水和雄

現代写真研究所主催  
オンライン特別公開講座



2022年広島原爆の日

金井紀光



清水和雄

広島県竹原市毒ガス島

開催日 7/8 (土) 19:00-21:00

視聴料 1000円

日本各地には負の遺産である、戦争遺跡が数多く残っています。その一つ、広島県、瀬戸内の島「大久野島」は戦時中、毒ガス製造の島でした。今も、そのおぞましさを留めています。

一方、8月6日の広島原爆の日には、戦争を想い、平和を願う多くの人々が広島平和公園を訪れます。また各地で、それぞれの立場で非戦を願う人がいます。「戦争イヤ」の思いは誰にもあるのです。それらを取材することで戦争の記憶をたどり、その実相に迫ります。



ロシアのウクライナ侵攻に抗議するデモ。2022年3月 東京新宿

金井紀光

#### 金井紀光プロフィール

1950年生まれ。広島市出身。写真家助手を経てフリーカメラマン、現代写真研究所卒。現在同所講師。1980年から2005年静岡市在住、編集プロダクション経営。静岡県の広報誌や観光ポスター、企業のPR誌、広告などを手掛ける。2006年より東京在住、現在に至る。主な個展「非電化暮らし」「災害列島あの日のこと」「8.6」「この町で」写真集「べんべん」「私景広島」2008年2011年2020年（共同制作）視点賞受賞

#### 清水和雄プロフィール

1955年生まれ。東京都出身。税理士法人京橋計理代表。2012年現代写真研究所基礎科フィルムコース入学、以後同デジタルコース、本科を修了し、入江ゼミ、金井ゼミに所属。全国公募写真展「視点」2014年、2017年、2019年入選、2015年優秀賞、2018年特選、2020年視点賞（共同制作）受賞

#### 参加お申込み方法

Zoomによるオンライン配信を行います。あらかじめZoom視聴のご準備をお願いいたします。

現代写真研究所事務局 [jimukyoku@genken.ac](mailto:jimukyoku@genken.ac)へ直接お申込みください。

お申込み確認後、当日のURLをお知らせいたします。

<https://www.genken.ac/> 03-3359-7611(電話) 13:00-18:00(月~土)

